

## 『唱題行について』

唱題は日蓮正宗の信心の上で最も重要な行であります。しかるに多くの人が本来の唱題行から離れた祈祷の行をやっているように思われます。即ち唱題と祈りを混同しているように見受けられます。

自分の願望が叶うことをひたすら念じながら題目を唱えるのが唱題と考えているようですが、これは祈祷行以外の何ものでもありません。

三大秘宝の本門の御本尊に向かい、御本尊を信じて唱題するのを本門の題目といいますが、大切なのはその際の一念です。

「命已すでに一念にすぎざれば、仏は一念いちねん随喜ずいきの功德と説き給へり。若し是れ二念三念を期すと云はば、平等大恵の本誓、頓教とんぎょう一乘皆成仏の法とは云はるべからず。」と

(持妙法華問答抄 二九九ろ 三行目)

ありますように、生命といってもその瞬間、瞬間の一念の連続です。したがって唱題という行をするときの一念がいかなるものであるかが極めて大切なのであります。言うまでもなく、その一念とは「信」の一念でなければなりません。

『譬喩品に云く「汝舍利弗、尚此なほの経に於ては、信を以て入ることを得たり。況や余の声聞をや」。文の心は、大智舍利弗も法華経には信を以て入る、其の智分の力にはあらず。』

(聖愚問答抄 四〇七ろ 一四行目)

御本尊を久遠元初自受用無作三身如来即日蓮大聖人そのものであることを信じる、あるいは御本尊は日蓮大聖人の尊極の御境涯・お悟りそのものであると信じる、あるいはこの御本尊への信心こそ我等衆生の唯一無二の成仏の直道であると信じる、等々の「信」の一念であります。

六道に迷う我が願望の叶うことを念ずるのは祈祷であり、この祈祷の一念と「信」の一念とは明らかに違うのであります。御本尊に唱題する本来の目的は、ご本尊と境智冥合して仏界を湧現することにあります。故に大聖人様は「観心の本尊」と仰せなのです。

『寿量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず」云云。日蓮が己心の仏界を此の文に依りて顕はすなり。其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此の経文なり。(義浄房御書 六六九ろ 五行目)

この御文について第六十五世日淳上人は次のように御指南されております。

「此の文を拝すれば、大聖人の御内証の仏界は一心欲見仏不自惜身命であらせら



れ、そのところが自受用無作の三身・妙法の当体にましますところをうかがうことができず。時々念々の振舞いそのところに、ひたすら仏を見んと欲する一心が仏であるぞと仰せられたものと拝せられます」と、我々凡夫の身が仏界を会得できる直道がはつきり示され、勇気で希望が湧いてまいります。

「一心欲見仏」とは、いわゆる一心に仏を見る、心を一にして仏を見る、一心を見れば仏なりというような三転読文の意義からの重々の深い意義があります。

修行においては「不自惜身命」である、すなわち身命を惜しまないということ、世間でも色々な道徳を説き、また色々なことをいいます。そのなかには、真心をもって事に当たるとか、色々な人のために行動をするというような意味で、色々な人がそこに、社会のため、ないし多くの人々のためにやっておりますが、やはりそれは尽きるところ、我というもの、自分自身というものが中心になっての判断であります。自分がここにいる、その自分がいなければどうにもならない、それはたしかにそのとおりです。しかし、その自分自身というものが基準になり、まず存在するということ肯定し認めて、そこから今度は自分自身の我という存在の自覚の上で立って色々有意義なことを行っていくことになります。ですから、自分自身の存在が脅かされるようなことになれば、その色々な行為・行動がいかによいことであっても、それはもうスツ飛んでしまうというような問題も出てきます。しかし仏道においては、その自分自身それ自体の身命を惜しまない。唱題の一念とはまさしく、このような信心の一念でなければなりません。

南無妙法蓮華経と口で唱えていても、我が願望の叶うことを祈る一念では六道の迷いそのものであって、仏を見たとまつらんと欲する信心の一念とは全く異なりませぬ。この祈祷の一念が生じている時は、信心の一念は滅してあります。同時に二念は生じえないからです。すなわち自分の願望を叶えて欲しいという一念が生じている間は、御本尊とは冥合しておりませぬ。したがって唱題の初めから終わりまで、自分の願いのみを祈っているのでは、信心の一念なき行になってしまい、御本尊と境智不冥合のまま終わってしまい、本来の唱題行とはほど遠いものになりかねませぬ。いふなれば祈祷の行、祈願の行ということになってしまい、本門の題目の修行とは到底いえないのです。

願いの叶うことを祈りつつ唱題せよ、という御指南は御書のどこにもございませぬ。勿論、大聖人様は祈祷を否定してはおられません。

「法華経をもつていのらむ祈は必ず祈となるべし」 (祈祷抄六二二六 三行目)



と仰せです。又、祈願しつつ唱題するのが謗法であるとも言えません。たとえ発心が真実でなくとも正境に縁するだけでも功德がはなだ多いからです。

しかしそれは初信の人に対しての御教示であり、信心十年、二十年の人の唱題行としてはあまりにもお粗末に過ぎるでしょう。

大聖人様が「祈り」について御指南される際には必ず「申す」と御教示されておられます。

「ただ嘆く所は露命計りなり、天たすけ給へと強盛に申し候」

(経王殿御返事六八六卷三行目)

「何なる世の乱れにも各々をば法華経・十羅刹助け給へと湿れる木より火を出し乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり」

(可責謗法滅罪抄七一八卷 九行目)

「とくとく利生をさすけ給へと強盛に申すならば、いかでか祈りのかなはざるべき」

(祈祷抄六三〇卷 一四行目)

「各々も不便とは思えども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華経に申し候なり、御信用の上にも力もをしまず申し給え」

(南條殿御返事九七四卷 三行目)

これ等の御文の如く、祈りと題目を唱えることとは明確に区別しておられます。

「申し」ながら「唱題」することは到底できることではありません。

このことから唱題と祈祷・祈念とは、きちんと立て分けていくべきであることがお分かりでしょう。故に当宗の勤行では四座の観念のところで祈念するのが原則になっていきます。信心は日々月々に強まり成長しなければなりません。

信心のレベルを初信のままにし、ただ題目の数だけを多くして満足しているというのでは、境涯の向上もままならず、宿業の転換、諸天の加護も微々たるものではないかありますまい。六道の欲念からの願望を御本尊にひたすらに祈る祈祷行の唱題を盛大に行って信心強情と錯覚し、本来の仏道修行たるべき唱題行にははるかに及ばぬ域で自己満足している多くの会員の姿を見るにつけ、悲しくなります。まことに勿体ないと思います。

「但在家の御身は余念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華経と唱えて候て…」

(松野殿御返事一一六九卷 九行目)

この「余念もなく」に注目しましょう。「信の一念」でないのは「余念」であります。「信」を込めれば「余念」はなくなります。



ここのとこころをしつかり心得、信を込めて唱題に励むことが大切です。

妙法仏界に冥合してゆく果報の中に、宿命の転換・生命力の湧現・諸天の加護等の一切の功德が具わっていることを強く確信すべきです。

唱題はまことに無上の甚深なる仏道修行そのものである故に、正しく厳格にそして真剣に取り組み、行じなければなりません。

※ 御本尊の仏力・法力はまことに甚深無量です。

譬喩品(新編開結 一七四六一)

「この法華経は、深智のために説く。浅識はこれを聞いて、迷惑して解せず。一切の声聞、および辟支仏は、この経の中において、力及ばざる所なり。汝、舍利弗すら、尚この経において、信をもって入ることを得たり。いわんや余の声聞をや。その余の声聞も、仏語を信ずるが故に、この経に随順す。己が智分に非ず。また舍利弗。憍慢・懈怠にして、我見を計する者には、この経を説くことなかれ。凡夫の浅識は、深く五欲に著し、聞くとも解することあたわず。また為に説くことなかれ。」

※ 以心代慧(信心をもって仏道の本因とする)

大聖人様の仏法とは、信をもって慧に変わると言う教えであります。

※ 舍利弗は知恵を持って華光如来になったのではない。

智慧というものは、一定のものではありません。子供から大人になる間、智慧というものは変化するものであります。大人になってから智慧がどんどん増えてくるか、そうではありません。五十〜六十になると耄碌してきます。しかも、大人になると智慧も変化がある。六十〜七十になって若い者と智慧比べをしてもかないません。たしかに経験上からすぐれているでしょうが、智慧というものは活動・行動が無ければ用を足しません。大智舍利弗も法華経には信を以て入る、其の智分の力にはあらず。

※ 寿量品(新編開結 四三六六一)

擣(つ)き篋(ふる)い和合して、子に与えて服せしむ。しかして、この言をなさく、『この大良薬は、色香美味にして、皆ことごとく具足せり。汝等服すべし。速かに苦悩を除いて、また衆の患なけん』と。その諸子の中に、心を失わざる者は、この良薬の色香ともに好きを見て、すなわちこれを服するに、病ことごとく除こり癒えぬ。